

昭和30年代のトイレ事情（Ⅱ）

——大阪市内の公共施設の事例——

山路茂則

I. はじめに

本稿は前号（20号）に発表した「昭和30年代のトイレ事情—大阪市内の住宅の事例—」の続編である。

いまから60年ほど以前のトイレ事情について筆者が体験・見聞したことを基にしてまとめようとする試みなので、できる限り正確を期すべく現地を巡見した。期日は平成28年（2016）5月2日である。

JR大阪駅前から市営バス36号系統「門真南」行に乗車し、国道1号線を東に進むと約30分で「蒲生3丁目」停留所に着く。学生時代に毎日通ったバスルートである。停留所の位置は当時と全く変わっていないが、街の景観は様変わりしている。

国道1号線の北側から京阪電鉄野江駅付近までのエリアは大小のマンションが林立し、戦前からの建築物は殆ど見ることはない。蒲生公設市場は食品スーパーマーケットに、風呂屋（銭湯）もマンションになっている。子ども相手に塩煎餅、べろべろ、「むき」と称する当ても、日光写真等を商っていた駄菓子屋は、これまたすべて見事に消滅している。

それに比べると、国道1号線の南側はまだ昭和30年代の匂いがそこかしこに漂っている。自転車修理店、旧珠算塾、木造の文化住宅、土手道から降りてくる階段、鍵の手に曲がる路地等も往時のままである。1軒ずつ表札を見ていくと、小学校の同級生の家が現在でも残っている。住む人の代はかわっているであろうが。

小学校の近くにある若宮八幡宮に立ち寄った。当所は大坂冬の陣において徳川方の佐竹義宣が陣をおいた跡ということで、立派な碑が建っていた。平成27年建立とあるのはNHK大河ドラマ「真田丸」の放映と関わりがあるのだろうか。碑文によると、「蒲生」の地名は湿地に生える「蒲の穂」に由来するとあった。

それでは早速、昭和30年代のトイレ事情について、具体的事例を示しながら考察していくことにする。

II. 各 論

1. 小学校

昭和最高のベビーブームを迎えたのが昭和22年（1947）で、出生267万8792人を数える。この子ども達が小学校に上がる昭和29年（1954）から数年間は教室不足ででんやわんや。増築しても続々と押し寄せる児童に対応しきれず、二部授業と称して児童を学年ごとに2組に分けて、一方は午前中に、他方は午後授業して、1つの教室を2回転させたりもしている。1クラスは5、60人で、1学年は11、12組だったりした。その頃の大阪市立S小学校の

トイレの事例である。むろん、当時はトイレとはいわない。男の子は便所、女の子はお便所あるいはお手洗いといっていた。

現状確認のため、約40年ぶりに同校の正門前に立つと校舎の配置は当時のままで、薪を背負って本を読んでいる二宮金次郎像まで残っている。学童急増対策で建てた木造2階建の部分は鉄筋コンクリートに変わり、従前からの鉄筋校舎と一つに繋がっていた。改築する場合は空きスペースに新校舎を建築し、旧校舎を取り壊すという手法を採用するのが通常であり、校舎の配置が当時のままというのは珍しいように思う。

さてトイレである。学童急増期以前からあった鉄筋校舎のそれは男女別の水洗式であった。ただ、大便器の水洗方式がどのようになっていたのか、いまだによくわからない。2、3年生くらいであったか、授業中に緊急事態が発生して止むを得ずトイレ行となり、さて水を流そうとしたけれども、それらしきフラッシュバルブもボタンも見当たらない。現在と同じ形状の和式便器なのでこれには困った。デパートで水洗トイレを使用した経験があり初めてではないのだが、どうしても水洗方法がわからない。時間は刻々と過ぎていくし、いつまでも教室に戻らないとなるとまずい。大ピンチに陥ったのであった。

近頃では手のひらをかざしたり、便器から離れると自動的に水洗する等の仕掛けもあるが、あの頃にそんなのはなかった。そしていま考えてみると、どうやらその水洗方式はタイマーを活用したものではなかったのか、と思うに至った。水洗トイレを使用した経験がない児童もいただろう、フラッシュバルブやボタンは破壊されやすく修繕費がかさむ、休憩時間に使用するのだから、その時だけ水を流せば節水できる等々の理由から、タイマーを用いた時限水洗方式(こんな用語があるのかどうか知らないけれども)になっていたのではなかろうか。

もし、仮にそうだとすると、一定の時間が経過するまでは便器内に排泄物が残っているわけであり、この点をどのように説明すればよいのかという疑問が発生する。落ち着いてしっかり観察しておくべきであったと、悔やむことしきりである。しかし、あの頃は男が個室へ入るのを目撃されるとからかいの対象となるため、男子たるもの、学校では大便はしない、と固く決意していた。それゆえにこの鉄筋校舎の個室は卒業までに1回使用しただけであるから、水洗方式に関して不詳である点はどうしようもない。

そして、トイレトペーパー。水洗トイレには水に溶ける紙が不可欠となるが、トイレトペーパーは用意されていなかったように思う。ちり紙(「ちりし」といっていた)を持っている子もいたが、新聞紙を切り揃えたのを鼻紙にしている子も少なくなかった状況の中において、水洗設備は円滑に機能していたのか、いまもってよく分からない。

児童急増対策として増築された校舎は木造2階建で、トイレは1階部分にあり、内部は細長く、床から2段高い位置に個室が10室ほどずらっと1列に並んでいる。最奥の個室の扉には「先生用」と墨書した木札が打ち付けてあり、児童は使用禁止である。個室の反対側は背の低い小便器がこれまた1列に並んでいる。このトイレは汲取り式であり、和式底無形便器を採用しており、便器の縁が欠けていたり、蜘蛛の巣が張っているのもあたりして、快く使用できるといえるものではなかった。便槽は個々には設けておらず、10室プラス小便器分が1つの大きな便槽に溜まるようにしてあるから、要するにプールの上にトイレがあるようなものだ。汲取り車が作業をしているのを1度だけだが目撃している。便槽に溜まっているのは大半が尿であり、ちり紙のほか新聞紙が溶けたようなものも多少あった。

先に少し触れたが、男の子が学校で大便をしにトイレに行くのは、からかいの対象になる。

個室は女の子専用と認識されており、男の子がそこへ入るのを目撃されると、「○○は女便所へ入りよった！」と囃されるのである。囃している当人たちはもとより、生きとし生けるもの、食べたらず出すのだが、そんなのは理屈であって、男の子が女の子専用の個室に入るのは恥ずべき行為なのだ。

ところが彼がどこに行ったのかはクラスの全員がわかっている。で、授業が終わったときにクラスの男たちは T 君の入った便所の前に集まって、扉を開けようとする（なぜそんなコトをするのか不可解な神経だが当時はそれがフツーだった）。T 君は開けさせないように中から必死にドアを押さえていた。開けたら一生の終りだから、もう彼も必死である。

（「昭和三十年の時間旅行」椎名誠）

木造校舎にはもう 1 カ所トイレがあった。そこは敷地の南西端にあたり、校庭から見えにくい位置で人目を避けやすく、使用者も他のトイレに比して少なかった。入ると右側に 7、8 室の個室、左側に小便器という配置で、やはりここも汲取り式である。この個室は何回か使用した経験がある。

学校では催さないように常々体調に気を付けているが、どうしても辛抱できない場合がある。ならば、どうするか。悪童連や仲良しの紀美子ちゃん、和美ちゃんに見つからないで個室を使用するチャンスは昼休みしかない。給食を大急ぎで食べ終えて、人気のないトイレに飛び込む一手である。但し、この作戦はリスクを伴い、昼休みまで我慢できないと悲劇が起きる。授業中に教師の許可を得て、衆人環視の中でのトイレ行となるからである。

ある日、給食もそこそこに無事、用を足し終えた。ホッとしたからだろう、何気なしに個室の小窓を開けるとプロペラ機が飛来し、宣伝ビラを撒いた。青空いっぱいにはビラが舞い踊るのを、ジッと眺めていたのを覚えている。

2. 映画館

テレビが一般家庭にまだまだ普及していない当時の、娯楽の王者は映画であった。映画館入場者数が延 11 億人を突破したのが昭和 33 年（1958）、全国の映画館数がピークに達したのが昭和 35 年（1960）でその数 7457 館。

わが家から徒歩 20 分圏内には城東東映・テアトル城映・スマイル劇場・関目東映があり、いずれも 2 番館である。入場料は昭和 30 年頃で大人 55 円、小人 30 円と記憶する。因みに市電で 2 停留所先の京橋駅周辺には封切館が集中しており、京橋東映、大映、松竹、東宝、日活アカデミー劇場、京橋劇場（洋画）、京橋ムービー劇場（新東宝・洋画）と各社揃い踏みであった。入場料は大人 95 円、小人 50 円であったと思う。

城東東映は商店街の南端に位置する映画館である。2 階席がある比較的広い劇場だが、いつも満員の盛況であった。座席と背もたれはクッションがなく、板張りのままであり、夏ともなれば天井からぶら下がっているプロペラ扇風機が熱気をかき回す。トイレの場所は標示されていなくても臭いでそれとわかる。風の流れによっては湿り気を帯びた臭気が館内に漂う。おそらく浄化槽式であったのだろう。トイレはなんとか用を足せばよいという程度の認識で、設備や維持管理には殆ど金をかけていなかった。扉のたてつけが悪くて大きく隙間が開く、鍵が

まともに掛からない、隣室との仕切り板には人体解剖学的な落書きなど、不都合な点を挙げていけばキリがない。また、トイレの壁は薄く、スクリーンの声が響いてくるという具合。ある時など、個室にしゃがんでいて、『紅孔雀』の那智の小四郎（中村錦之助）と悪人・信夫一角（三條雅也）が秘宝の鍵をめぐって斬り合う声が聞こえてきた。このチャンバラ場面を見逃してはならじと、大急ぎで場内へ戻ると、時すでに遅く、「第一編・終」と映し出され、なんとも残念無念な思いをしたのであった。

手元に、モギリでくれる「城東東映ニュース」No.236（昭和37年7月25日発行）があるので、上映の実態を参考までに紹介しておこう。今週の映画（25日～31日）として『君の名は 第1部』『同 第2部』（松竹・岸恵子）、『祇園の暗殺者』（東映・近衛十四郎）の3本立が紹介されている。また、翌週（8月1日～7日）は『男度胸のあやめ笠』（東映・市川右太衛門）、『謎の赤電話』（東映・南広）、『霧子の運命』（松竹・岡田茉莉子）となっている。『長谷川公之映画シナリオ・コレクション 警視庁物語』の作品リストによると、『謎の赤電話』は昭和37年（1962）6月に封切されたとある。このことから、2番館といえども作品によっては案外早くにフィルムが流れてくる場合もあったという事実を知るのである。

城東東映の跡は小さなマンションになっている。

テアトル城映は「テアトル」などとフランス語を使用して大仰だが、城東市場の2階にあるという、実になんとも大衆的な映画館である。それでも城東東映よりも新しいだけあって、開館当初から空調装置が完備していたし、ロビーのトイレは男女別の水洗式で明るかった。そして換気が良かったのであろう、トイレの臭気が殆どなかったのは何よりであった。この映画館は主として日活、東宝作品を上映する2番館であり、観客の年齢はどちらかといえばお兄さん、お姉さんクラス以上で、小学生の筆者にはトイレは臭かったけれども、時代劇中心の城東東映を鼻根にしていたものである。

テアトル城映は夜店が出ている日は、9時過ぎになると館外スピーカーで「ただいまから割引料金になります。本編を始めから全部観られます」と呼び込んでいた。この放送を聞くと、夜店見物の子どもたちは夜も更けてきたのを実感し、早く帰らなければ叱られる、と家路を急ぐのであった。

城東市場は現在、大規模薬品店となり、映画館があった2階部分は倉庫になっている。

封切館では京橋東映へよく行った。映画館への往復は、市電の乗車賃（大人13円、昭和30年～36年）を節約するために歩いて行く。

さて、この劇場のトイレに関してである。当館は水洗トイレであったが、いわゆる薬研式となっていた。薬研は薬種を細かく砕くのに用いる舟形の器具で、その断面はV字形になっている。漢方薬の製造には取っ手の付いた円板を当てがって薬種を粉末にするのであって、時代劇映画ではお馴染みである。このようなV字形断面の溝にまたがって用を足すことから、複数の接続したトイレを薬研トイレという。つまり、個々の大便所には底無形大便器を設置し、排泄物は溝の上に落ちるが、上流から水を流すことによって排泄物を運び去るという仕掛けである。いうならば、川屋の近代版と考えればわかりやすい。この方式を採用すると、異物による便器の詰まり等に対処しやすく、維持管理上のメリットがある。ただ、難点はタイミングが悪いと、上流で使用している他人の後始末紙等が尻の下を流れていくのを見てしまう場合もなきにしもあらず、ということである。

筆者は昭和43年（1968）、関西大学天六学舎でも薬研トイレを使用した経験がある。水を

流す間隔はタイマーで制御されていて、常時流れているのではなかった。水使用量を節約するために授業の前後など、利用者が集中する時間帯を中心に流れるよう設定してあったのだろう。映画館の場合、トイレ利用の大半は休憩時間中であり、この時間に合わせて集中的に水洗すればよい。この観点からすると、薬研式は合理的な水洗処理方式である。

3. 風呂屋

喜田川守貞が著わした『近世風俗志』巻之二十五に「京坂にて風呂屋と云ひ、江戸にて銭湯あるひは湯屋と云ふ。」とあるように、大阪人は銭湯といわずに風呂屋という。「さあ、風呂屋へ行くでェー」と、親は子を連れて出かけるのだ。入浴料は大人16円（昭和32年）、19円（昭和37年）と『戦後値段史年表』にみえる。内風呂をもつ家はほんの僅かであり、たいいていの家は風呂屋へ行っていた。

近所には「梅鉢湯」「蒲生新温泉」「J温泉」の3軒が営業していた。

まず、「梅鉢湯」。正面から見ると寺院風の造りでレトロブームの昨今、ガイドブックに〈ぜひ訪れたい湯〉と紹介されそうな建物である。今なら喜び勇んで入浴しに出かけるところだが、当時は子どものこととて、古くて陰気な感じがするこの湯は避けていた。

よく利用していた人の話だと、ここは男女の浴槽が背中合わせになっており、仕切壁の底から約50cmまでの部分は男女イケイケになっている珍しい構造だったそうである。おそらく、湯量・湯温を男女均等に保つための方式であったと考える。

浴場は馬小屋みたいに狭く粗末な建物で、空間には男湯、女湯の仕切りがあったが、湯ぶねにはそれがなかった。つまり一ともぐりすれば、男湯から女湯に出られるわけである。子供達はよくそちこちにもぐりっこして遊んでいたものである。いや、一人きりだと分ると、私もよくもぐって往ったり来たりしたものだ。女湯の流し場や湯ぶねに、長い髪の毛が落ちているのを見つけると、それだけで胸がときめいたほどだから、

（「オチのある話」石坂洋次郎）

引用している文は青森県弘前市に生まれた作家・石坂洋次郎が経験した戦前の湯段温泉の様子であるが、仕切板で男湯と女湯を分けていたことがわかる。これと同様な浴槽が戦後も梅鉢湯で採用されていたのである。

後年、小学校の同窓会が開催された際に、仲良しだった紀美子ちゃんは次のように証言している。

「あのお風呂屋さんにはトイレがなかったの。それで入浴中にオシッコがしたくなってしもて、湯船の中でそっと失礼しちゃった。帰り際に母が、今日はよう温もった、と喜んでたけど、それはひよっとしたら私のオシッコの所為かも知れへん、と一人ほくそ笑んだ記憶があるんよ」

いやはや、クラスのアイドル的存在であった女の子が・・・。

現在ではどこでも脱衣所の一角にトイレを設けているが、昭和30年前後ではトイレがない風呂屋があったらしい。

梅鉢湯は取り壊されて駐車場と住宅に変っているが、こんなに狭かったのかと改めて跡地を眺めた。

一方、「蒲生新温泉」は戦後に営業を始めた風呂屋で、外観に目立った特徴はない。この湯は小学校の同級生（女の子）の親が経営しており、彼女も時々番台に座っていた。そんな時はお互いにバツが悪く、彼女はうつむき加減になるし、当方もそそくさと脱衣箱へ脱いだものを投げ入れるのであった。ここは当初からトイレを設けていた。

当湯があった場所には、高層マンションが建っている。

3軒目の「J温泉」。この風呂屋は城東商店街の中ほどにあった。毎月4のつく日、すなわち、4、14、24日はこの商店街に夜店が出るので、それを見がてらに入浴に行ったものである。ところが屋号がどうしても思い出せない。今般、巡見時に、商店街のアーケードから「ゆエース温泉」の広告灯が下がっているのを発見した。脇には新築のマンションが建っている。してみると、最近まで営業していたと考えられるが、当時の屋号はそんなものではなかった。「城東温泉」だったかも知れないので、仮に「J温泉」としておく。

ここの湯は保健衛生対策であろうか、めっぼう熱く、42℃ くらいはしていたと思う。

入浴マナーに関する掲示があり、その中に「入浴前に用便を済ませておくこと」というのが書かれてあった。何もそこまで書かなくてもと思うけれども、実際に女湯で糞塊が湯船に浮いていて大騒ぎになり、全員で湯を掬い出したという話を耳にしたことがある。大人がわざとそのようなことをしたのであれば犯罪行為にあたるが、通常なら考えられない事件であり、おそらくは母親とともに入浴していた乳児あるいは幼児が、あまりの気持ちよさにふと漏らしてしまった結果ではなかったのかと推量する。

4. 公衆トイレ

市電を京橋停留所で降りて京橋商店街（現. 京橋一番街）を通り抜け、京阪電鉄京橋駅の踏切を渡った正面が国鉄城東線（現. JR 大阪環状線）京橋駅の改札口である。現在の京阪京橋駅は昭和45年（1970）、旧駅の南側、国鉄駅の西側に、国鉄線を乗り越す形で新築されたものである。

これから取り上げる公衆トイレは、京橋商店街の背後を高架で走る城東線と、京阪旧駅の踏切が交差する地点の北側に位置していた。通りから数段高いところに設けてあり、男女共用のコンクリート造、内部は個室2と2～3人用の小便所である。建物全体から臭気が発生しており、個室に新聞紙が散乱しているのは読み終えたのを捨てていく他に、後始末に用いた残りがそのままになっているからだ。おまけに落書きも酷く、かなり荒れた様相を呈しており、通行人から丸見えというこのトイレの利用状況は如何であったのだろうか。

筆者は家族と一緒に天王寺動物園や梅田の阪急百貨店へ行くときなど城東線を利用していたが、このトイレへ入っていく人を減多に見なかった。そこで、このトイレがどのような使われ方をしてきたのかと推測してみたい。

〈もはや戦後ではない〉と宣言された昭和30年代、大阪近郊鉄道の三悪の一つとして京阪京橋駅の混雑（他には近鉄奈良線今里・鶴橋間、阪急宝塚線三国・十三間の混雑）が新聞で何度も取り上げられている。このことから明らかなように、京橋駅付近は通勤者で溢れかえっていた。駅周辺には飲食店、パチンコ店、風俗店が多く、夕刻以降には勤め帰りにちょっと一杯といった男性諸氏もたくさんいたことだろう。こうした人々を中心にこの公衆トイレは重宝されたのではないだろうか。

丁度向い側が共同便所でその臭気がたまらなかつた。その隣は竹林寺で、門の前の向って右側では鉄冷鉱泉を売っており、左側、つまり共同便所に近い方では餅を焼いて売っていた。醤油をたっぷりつけて狐色にこんがり焼けてふくれているところなど、いかにもうまそうだったが、買う気は起らなかつた。餅屋の主婦が共同便所から出ても手洗水を使わぬと覚しかったからや、と柳吉は帰って言うた。

〔夫婦善哉〕織田作之助

「夫婦善哉」に登場するのは、ミナミの繁華街千日前の公衆トイレだが、周囲に臭気をまき散らしているという点は京橋のそれと同一である。

臭気の原因は、このトイレが汲取り式ということもあつただろうが、小便所の構造が大きく影響していたと考える。昭和30年代、多くの公衆トイレや駅トイレの小便所は個々に小便器を設けておらず、便器(?)といえは溝と壁だけであり、用を足そうとする人は床面から1段高くしてある石の上立って、剥き出しになったセメント塗の壁に向かって放尿する、というスタイルになっていた。ここで問題は溝・壁を洗い流す頻度である。間隔があくと溝や壁に尿が付着したままとなり、その間、臭気をたちのぼらせることになる。

溝と壁で構成する小便所は明治時代からごく普通にあつたもので、明治40年(1907)発行の『滑稽新聞』に掲載された「公設便所」の絵(『江戸の糞尿学』P211)には、男性に交じって壁に尻を向けて後ろ向きに用を足している女性の姿がみえる。

京都、奈良あたりでもやっぱりそうで、共同便所などに這入ると、男性用の石の上に女性がならんで、こっちを向いて、後ろの方へオシッコをしていたりした。今でこそ男性用などというが、あの時は男女というより、大小の別に従っていた訳だ。

〔旅=父と子〕永六輔

引用したのは永忠順が明治末期から大正時代にかけてのトイレ事情を、子の六輔に語った部分である。しかし、敗戦直後の荒廃した市中なら知らず、もはや昭和30年代に入ると女性が男性と小便所を共用する筈がなく、溝と壁だけで構成する小便所は男性専用として使用されるのである。

街角の公衆トイレや駅のトイレが臭かつたのは大阪に限らず、日本全国どこでも同様であった。ここでは東京・下北沢駅前の様子を紹介しておく。

この女が指定してきたデイトの場所は、彼女の下宿にちかい下北沢という駅前だったが、(ミツは新宿や渋谷のようななれない盛り場だと路に迷ってしまうからと書いてきたのだ。)そこはきたない駅便所がすぐ横で鼻をさすようなアンモニアの匂いがこもり、(中略)しかし駅の便所から漂う鼻をさすような匂いのなかで彼女を待っている間、長島のこの言葉が思いだされ、こうしてまで女の子と交際しようとする自分が急にイヤになってきた。

〔わたしが・棄てた・女〕遠藤周作

筆者が日常的に行動する範囲内の街角の公衆トイレといえは、ここに報告した京橋のトイ

レしか思い当たらない。

このように公衆トイレが少ない状況の中において、屋外で遊んでいる時やお使いに出かけた時に、急に用を足したくなったらどうするのか。

冬のある晴れた一日、私は何かの用事で、街の大通りを歩いていた。例によって、大きな糸店と理髪店の間に入った小路で、中年の二人の百姓女が、モンペの紐を解いて立小便を垂れていた。その時、大通りを、年のグンと若い、スッキリした服装の二人のアメリカ兵が通っていった。彼等にしては普通の服装なのだろうが、敗戦直後の日本人達のうす汚ごれた服装の中では、それが光って見えたのである。それを見つけたつれしょんべんの百姓女の一人が

（「夕明りの中において」石坂洋次郎）

石坂洋次郎の郷里・弘前市の戦後の状況を綴ったものである。文中に「例によって」とあるように、地方都市では昼日中でも、女性が人通りの少ない小路で悠々と小便するのは珍しくなかったらしいが、大阪市内においては、男性はともかく、女性の用足しはトイレ以外では困難を伴っていた。が、そこはうまくしたもので、昆虫採集ができるほどの原っぱや資材置場になっている空地などがあちらこちらにあった。だから、男の子、いや女の子でも物陰で用を足すのに何不自由はない。蒲生公設市場の北側に広い原っぱがあって、そこで新聞社主催の納涼映画会が開催されたりすると、大人の女性であっても夜陰にまぎれて用を足すことがあった。

故・永田帆船氏は日本川柳協会常任理事、NHK 川柳教室講師等を歴任された川柳作家である。筆者が川柳を好み、これまでの著作の中に川柳を多数引用しているのを喜ばれて、次の作品をプレゼントして下さった。

つなぐ手をほどいてトイレ右左
草むらに女がしゃがむ月あかり

初めの句はデート中の男女を詠んでおり、微笑ましくなってくる。

そして、次の句はいつ頃の情景を詠んだものか。まだ街が暗かった時代のことであつたろうと思われる。

Ⅲ. ま と め

平成の世が28年経過した現在、公共施設のトイレは格段に進化している。

学校のトイレは水洗化され洋式便器が増加しつつあるが、経費面からトイレットペーパーの備え付けに苦勞している学校もあるようだ。また、家庭のトイレでは洋式が主流となるにつれて、和式便器を使えない、使った経験がない児童も増えてきて、校外学習やキャンプなどを企画する際の課題の一つになるとのことである。

トイレ内部は明るく塗装され、快適空間となるように様々な工夫がされている。例えば、個室の壁に樹木や花鳥を描き、あたたかも自然の中で用を足しているかの如く演出しているトイレに出会う。このように美しく整備をすると初期の経費はかかるけれども、落書きなどもなくな

って、教育効果が高まるとのことである。

一方、残念ではあるが、男の子が個室へ入るのは、いまだにからかいの対象となっており、一部では小便所を含めて個室化してはどうか、という案も出ているらしい。

映画館に関しては、本稿で取り上げた劇場はすべて廃業している。原因は臭いトイレではなく、テレビの普及と娯楽の多様化にあるが、いま新規に開館する劇場は、快適なトイレを設けていないと集客に影響するという理由で、トイレ設備にも金をかけている。

風呂屋について。筆者が1回でも入浴したことのある風呂屋は、すべて消滅している。

トイレは当時からたいてい設けてあり、和式大小兼用便器が多くみられた。脱衣スペースを少しでも広く確保しようとする経営者の姿勢のあらわれであったのだろう。

最後に公衆トイレであるが、街中での設置数はそれほど変わっていないのではないかとむしろ減少気味のように思える。そして、コンビニや商業施設がその代替となっている。溝と壁で構成する小便所は減多に見かけないが、時折、地方の駅舎や寺社で遭遇し、悪臭に閉口しつつも往時をなつかしく思い出すことがある。

本稿では筆者が小学生の頃に接していた公共トイレを取り上げており、その体験や見聞はごく狭い範囲のものである。そうではあっても、大阪市の中心部を少し外れた地域でのトイレ事情の一端は明らかに出来たのではないかと考える。施設・設備の実態を知るとともに、当時の人々のトイレに対する思いを共有してもらえれば幸いである。

〈参考文献〉

- 『昭和三十年の時間旅行』（『ここだけの話』所収）椎名誠 PHP 文芸文庫 2015
『オチのある話』（『私のひとりごと』所収）石坂洋次郎 講談社 1969
『夫婦善哉』織田作之助 新潮文庫 1974
『旅＝父と子』永六輔 毎日新聞社 1970
『わたしが・棄てた・女』遠藤周作 講談社文庫 2012
『夕明りの中にいて』（『私のひとりごと』所収）石坂洋次郎 講談社 1969
『長谷川公之シナリオ・コレクション 警視庁物語』長谷川公之 アートダイジェスト 1994
『近世風俗志（四）』喜田川守貞 宇佐美英機校訂 岩波文庫 2001
『江戸の糞尿学』永井義男 作品社 2016
『決定版 20世紀年表』神田文人・小林英夫編 小学館 2001
『戦後値段史年表』週刊朝日編 朝日文庫 1995
『大阪市営交通 創業100年』大阪市交通局 2003
『鉄道ピクトリアル』No.822 鉄道図書刊行会 2009
『トイレ考現学』山路茂則 啓文社 1991
『トイレ雑記帳』山路茂則 啓文社 1994
『トイレ文化誌』山路茂則 あさひ高速印刷出版部 2001
『炎と生きるーアサヒ衛陶株式会社前史ー』アサヒ衛陶株式会社 1996
『アサヒ衛陶50年史』アサヒ衛陶株式会社 2001